

ニコラ・ラバンカ著『カポレット—敗北の歴史と記憶』
Nicola Labanca, *Caporetto. Storia e memoria di una disfatta*

潮屋 郁也

SHIOYA IKUYA

東京外国語大学大学院博士前期課程

Tokyo University of Foreign Studies, Master's student

Quadrante, No.21 (2019), pp. 323-324.

ニコラ・ラバンカによる『カポレット—敗北の歴史と記憶』は、カポレットの戦い¹を取り上げ、同戦いをめぐる言説や記憶、研究史について簡潔ながら包括的に論じる仕事である。シエナ大学教員のラバンカは、近代イタリア軍事史、とりわけ植民地における戦争に関する研究を大きく前進させた功績をもつ研究者である。

本書は第一章「兵士の声」、第二章「敗北の歴史」、第三章「カポレットの記憶、歴史、未来」の三章から成る。以下各章についての特色を簡潔に述べる。

第一章「兵士の声」は、カポレットの戦いの敗北とその後の敗走を主に扱い、敗北を検証する委員会に提出された兵士たちの膨大な量の証言と資料を用いて、当時の同戦いに関する語りを再構成している。また兵士のみならず軍内の様々な階級の証言をも扱うことで、前線の兵士からは見えない同戦いを巡る利害を浮き彫りにしている。

第二章では、兵士の証言に対する意識は継続させながら、戦闘の趨勢や敗北の背景など戦闘それ自体について論じる。ここで焦点となるのは、カポレットの戦いの敗因をめぐる議論である。ヴィットーリオ・ヴェーネトの戦い²に至るまでの時期、軍上層部は、兵士たちに対して不信感を抱いていたことが委員会の調査から明らかにされる。国内の反戦運動やロシア革命への不安が合わさって、カポレットの敗因（実際には、敗北の一因は指揮

官の無知と無能力であったことを、下級将校や兵士の証言は示している）は戦わない兵士やデモする平和主義者に帰された。この文脈におけるカポレットの戦いの神話化は、彼の研究を踏まえた重要な視点である。

第三章は、カポレットの戦いを史学史的に検討した章である。カポレットの戦い後の1世紀にわたり、各々の時代において、カポレットの戦いがどのように記憶され、語られたのかを詳細に検討している。政治情勢に従って反省を欠いたまま様々に論じられるにとどまる傾向は特にファシズム期に強かった。第一次世界大戦が愛国主義的な視点から研究されなくなるのは、60年代末以降のことであると、ラバンカは第一次大戦研究の大家イスネンギの言葉を引いて述べている。またこれからの研究課題として、捕虜となった兵士の証言や、イタリア史の文脈だけでなく第一次大戦の他の参戦国（イギリスやフランス、ハプスブルク帝国³）との関連を総合した研究が挙げられている。

本書の最大の特徴は、兵士の証言の採用である。著者はカポレットの戦いの研究において兵士の証言が十分に顧みられてこなかった点に着目し、膨大な証言を駆使し、カポレット研究における新たな視点を提供している。著者の主要な研究対象がイタリアの植民地戦争である点を鑑みると、本書は少々例外的に思われる⁴。しかし植民地戦争に関

¹ カポレットの戦いは第一次大戦中、イタリア軍とオーストリア、ドイツ連合軍の間で行われた戦闘で、1917年10月24日から11月9日までの一連の軍事行動を指す。イタリア軍はこの戦いに敗れ、撤退を余儀なくされた。前線が大きくイタリア領内に食い込む結果となった。

² この戦いでイタリア軍はオーストリア軍に対して決定的な勝利を収めた。

³ イスネンギらはイタリア側の証言とオーストリア側の証言を扱った書籍を発表したが、それぞれ数は多くない。Mario Isnenghi con Paolo Pozzato, *Oltre Caporetto, La memoria in cammino, Voci dai due fronti*, Venezia, Marsilio Editori, 2018を参照。

⁴ ラバンカの研究対象は主に植民地戦争であるが、カポレットの戦いについて1997年に書籍を発表している。本書



しても、兵士の日記に注目するなど本書に重なる手法をとっていることに示される通り、戦争の担い手一人一人の目に映る光景をどのように再構成することができるのかが著者の一貫した関心であり、それが本書にも通底していると考えることができよう。カポレット研究において、兵士の証言が取り上げられたこと自体は初めてではないが、本書はこれまでの研究以上にそれを重視し、軍隊内の階層や社会の認識との差異に注目しているという点に意義がある。

もうひとつの主要な特徴は、研究史を検討した点である。著者はカポレット後の 100 年を振り返って、カポレットの戦いの解釈が、時代の要請に沿って行われてきたことを示した一方で、どの時代においてもカポレットがイタリア史というナショナル・ヒストリーを構成する一つの歴史的事象として解釈されてきたことを示唆している。トランスナショナルな視野でカポレットの戦いを検討する視点は、カポレットの歴史的解釈の新たな可能性を提示していると考えられる。

以上の二点から、本書は今後、カポレットの戦いについて、また第一次世界大戦の研究史においても、参照されるべき仕事になると考えられる。

はそれを踏まえた内容となっているが、兵士の証言への注目などより広範な視点から戦いを捉えることに成功して

いる。Nicola Labanca, *Caporetto. Storia di una disfatta*, Firenze, Giunti Editore, 1997 などとも参考。